

# ある むぜお

府中市郷土の森博物館だより

al museo

2025 年 6 月 20 日

## No.152



府中に広がっていた農地（国土地理院 1961 年撮影の空中写真より作成）

### もくじ

- 1-2 田んぼとくらし  
その 1…府中の田んぼはどこにある？
- 3 最近の発掘調査  
旧甲州街道沿いで中世の道路跡の一部を発見
- 4-5 NOTE  
古代国司の食事をのぞく
- 6 展示会案内  
特別展 田んぼとくらし
- 7 展示会案内  
復元建物展示 ハケ下のかやぶき民家
- 8 series 戦後 80 年－府中と戦争  
①こどもの飯茶碗と代用品
- 9 令和 6 年度利用状況 寄贈・寄託資料一覧  
新刊案内
- 10 天文はじまり物語  
①宇宙のはじまり

### 田んぼとくらし

かつて府中市内にはたくさんの田んぼがありました。そこは単に米づくりの場所というだけではなく、さまざまな役割や用途がありました。そうした府中の田んぼと人々とのかわりについて 4 回シリーズでご紹介します。

#### その 1…府中の田んぼはどこにある？

1961 年（昭和 36）に現在の郷土の森博物館（1987 年開館）周辺を撮影した空中写真を見ると、農地が広がっていたことが分かります（点線で囲んだ場所が博物館）。そして、これらの農地の大半が田んぼだったのです。

# 田んぼとくらし

## その 1… 府中の田んぼはどこにある？

郷土の森博物館周辺では、毎年 5 月の後半頃から、雨天時や夜を中心に、カエルの鳴き声が聞こえるようになります。園内に幼生のオタマジャクシが育つ環境として最適な田んぼ（水田）があることから、カエルが産卵のために集まってくるのです。同じ頃に、博物館周辺の田んぼに水が入ると、その鳴き声は風情を感じるどころではない大合唱になります。

博物館のある南町は、府中市内の東西にのびる府中崖線（ハケ）の南側に位置します。この通称・ハケ下は、大昔、多摩川に削られてできた低地で、その水を利用できることから田んぼに適していました。

表紙にある 1961 年（昭和 36）に撮られた博物館周辺の空中写真をみると、農地が一面に広がっていることが分かります。そこに写る農地のほとんどが田んぼで、こうした土地の利用はハケ下全域でみられました。しかし、現在は住宅が多くなり、田んぼはあまり目立たなくなりました。

右上の表は、1954 年から 2024 年（令和 6）までの市内の田んぼと畑の面積（単位：アール）を、10 年間隔で抜き出したものです。府中市全体の面積は約 29 km<sup>2</sup> = 290,000 アールです。町村合併により府中市が誕生した 1954 年当時は、市域の約 28% が農地で、田んぼだけだと約 9% に相当しました。しかし、30 年後の 1984 年に田んぼは市域の約 3%、2024 年になると約 1% にまで減少しています。

この減少は、国の減反政策の影響が大きくありますが、多くの農地が住宅や工場の用地などになったことも原因です。ハケ下を東西に横断する高速道路や、それに付属する国立府中インターチェンジも、ほとんどが田んぼを埋め立ててつくられました。

現在でも田んぼが比較的残っているのは、南町、住吉町、日新町、四谷などの南西部です。しかし、そこでも田んぼが次々と新たな住宅に変わっています。場所によっては住宅と住宅のはざ

府中市の農地面積 単位：アール(1アール＝ 100 m<sup>2</sup>)

| 年    | 田んぼ    | 畑      | 合計     |
|------|--------|--------|--------|
| 1954 | 27,350 | 54,651 | 82,001 |
| 1964 | 24,066 | 33,946 | 58,012 |
| 1974 | 11,195 | 16,489 | 27,684 |
| 1984 | 7,978  | 13,105 | 21,083 |
| 1994 | 6,584  | 10,526 | 17,110 |
| 2004 | 4,853  | 9,764  | 14,617 |
| 2014 | 5,828  | 10,188 | 16,016 |
| 2024 | 3,245  | 10,157 | 13,402 |

府中市統計より作成

まに田んぼがある、というような状況です。

こうしたなかで、今ある田んぼを探すヒントになるのが、用水路です。ハケ下には、給排水設備としての用水路が網の目のように広がっていて、各所でそれをたどることができます。現在では遊歩道や暗渠になって分かりにくい場所もありますが、通水している 5 月から 9 月頃なら、流れている用水を見つけられます。それをたどって、希少になった現在の府中の田んぼを確認してみたいかがでしょう？ ただし、無許可での田んぼ立入は厳禁です。（荒一能）



住宅に囲まれた現在の府中市四谷の田んぼ



最近の発掘調査

# 旧甲州街道沿いで 中世の道路跡の一部を発見

八幡町三丁目 府中市ふるさと文化財課 谷口 広大



道路遺構底面の波板状凹凸面

現代の街中には道路が張り巡らされており、私たちはそれを利用して目的地へと向かったり、荷物を運搬したりしています。このように道路を利用するのは昔の人々も同様で、発掘調査によって府中市内各地では道路遺構（昔の道路跡）が続々と見つかります。そのなかに、現在の旧甲州街道の前身道とも考えられている中世の道路遺構があります。この道路遺構は、東は京王線東府中駅から、西は宮町二丁目交差点の付近まで、旧甲州街道に沿うように東西方向に点々と確認されています。今年おこなわれた調査でも見つかりましたので紹介します。

今回の調査場所は、東府中駅から西に 350 m ほど離れた地点で、旧甲州街道の北側にあたります。その場所で、幅約 4 m の道路遺構を約 12 m にわたって確認しました。横断面の形状は浅い皿状で、ローム層まで掘り込んでいます。さらに、遺構内に堆積した土が硬く締まっていることや、その土を除却した遺構の底面には、波板状凹凸面が残っていることを確認しました。波板状凹凸面とは、道路の方向に直交して窪みが等間隔に並ぶ遺構のことで、道路跡で見つかることがあります。この窪みは、路面を固めるため、または雨水の浸透を促すための工夫だとする考えのほか、牛馬の歩行により自然にできたとする説まであります。

さて、今回発見した道路遺構については次のように考えます。まず、遺構内に堆積した土が全体的に硬く締まっていることから、構築後、長期にわたって道路として利用されていたと推測できます。また、波板状凹凸面については、遺構内に堆積した土を取り除くまで視認できなかったため、道路の構築時に形成された可能性が高いと言えるでしょう。

道路遺構が有する情報は多いです。しかし、それ以上に不明な点や未解明な点が多い遺構でもあります。今後の調査によって、このたび得られた情報と合わせてこの遺構の性格が明らかになることが期待されます。



道路遺構の断面



「國」の文字が書かれた土器 “国府の給食センター” の備品か  
(府中市宮町3丁目出土／府中市教育委員会蔵)

### ▼ 都からやって来た国司

奈良・平安時代の府中には武蔵国<sup>むさしのくに</sup>（今の埼玉県、東京都、神奈川県の一部）の国府が置かれました。政治・経済・文化の中心地である国府に集った人びとのなかでも、都から来た役人「国司<sup>こくし</sup>」は、国府を考えるうえで大変重要な存在です。守・介・掾・目の四等官で構成され、国ごとに定員が決められていました。天皇の代理として勅令<sup>ちよくれい</sup>を携えて諸国に派遣され、行政、警察、軍事、宗教などあらゆる事柄につき統率<sup>ちやうそつ</sup>の任を負いました。

ここでは武蔵国<sup>むさし</sup>に赴任<sup>しゆにん</sup>してきた国司たちの生活の一端を知るために、その食事情を少しばかりのぞいてみましょう。

### ▼ 国司への給食

古代国府に関連する施設のひとつに、「国厨<sup>くにくりや</sup>」という国府所属<sup>こくふじゆん</sup>の官人への給食<sup>きんじき</sup>を担った機関、いわば給食センターがあります。

武蔵国府跡の発掘調査では、「國」<sup>くに</sup>と書かれた土器が複数出土しており、そのなかでも上写真の3点は、同じ調査地点からまとまって出土した

平安時代の須恵器<sup>すえき</sup>と土師質土器<sup>はじしつ</sup>です。これらは、“国府の厨の備品<sup>びひん</sup>（給食用食器）”であることを明示するために土器に「國」の文字を記したと推測されます。国の下部行政単位である郡が管轄する厨もあったので、食器を管理するうえで帰属を明らかにする必要があったのでしょう。

奈良時代の法典『養老令』戸令の国守巡行条には、国司の長官である守の部内巡行に関する規程があります。守には、年に一度任国に属する各郡をめぐり、地元の古老に故事を尋ねる、民情を把握<sup>はあく</sup>する、裁判の不正を正すことなどが任務として課されてきました。この部内巡行にあたって、国厨が同行したと推測されます。

武蔵国府の中心から東へ約7kmの場所にある調布市<sup>ちやうふ</sup>の下布田遺跡<sup>しもふだ</sup>では、「国厨」と書かれた土器が出土しています。このことは、国府の外に国司の給食をサポートする出先機関が置かれていた、あるいは国司の巡行にともなって国厨が移動して活動した可能性をうかがわせます。

このほか、武蔵国府跡では国司の官職を示す「守」や「目」、国司館<sup>こくしのたち</sup>（国司のすまい）を示す「大

館」「大目館」と書かれた土器が出土しています。これらは、国厨や国司館における食器管理のために、使用者（官職）や使用場所を示す文字が記入されたと考えるのが自然です。

国司館は居住・政務のほかには宴会の場にもなりました。国司同士や地元の役人である郡司らと宴席を囲み、和歌をたしなみ、政治のあれやこれやを語り合ったことでしょう。奈良時代の歌人として知られる大伴家持が越中国（富山県）の守を務めている間に作った和歌が『万葉集』に収録されています。746年（天平18）に「八月七日の夜、守大伴宿禰家持の館に集ひて宴する歌」という題詞が確認できるほか、「館」と「宴」の語は複数回セットで登場し、国司館での宴会が頻繁におこなわれていたことをうかがわせます。このような宴会でも国厨が食事を提供していたと考えられます。国司の生活は、国厨なしには成り立たなかったと言えるでしょう。

#### ▼ 武蔵国司も賞味した?! 高級品「蘇」

さて、具体的に国司が何を食べていたのか…。実は、酸性土壌の地中では食物残渣（食べカス）は残りにくいため、食事の全体像を復元することはなかなか難しいのです。よって部分的にはなりますが、ここでも文字が書かれた考古資料をもとに推測してみましょう。

右写真は、奈良県の平城京跡で出土した荷札木簡という資料です。武蔵国から都へ納められた品に付けられた縦6.5cmの木製札で、現代の配達伝票のようなものです。

この荷札木簡の表面には「武蔵国進上蘇」、裏面には「天平七年十一月」と書かれ、735年に武蔵国から都（平城京）へ貢進された蘇に付けられたものとわかります。蘇とは「蘇」の俗字で、牛乳を煮詰めて濃縮させたものです（現滋賀県の近江国では「生蘇」をつくっていたので煮詰めきらないものもあったようです）。史料により日本では700年（文武4）には蘇の製造が確認でき、高栄養価であることから天皇・貴族の薬用品としても使用されたと考えられています。

古代の日本列島は60余の国に分かれており、927年（延暦5）成立の『延喜式』によると、大多数の国々から6年に1回の当番制で都に蘇を納めることになっていました。武蔵国は寅と申の年

に大壺7口（各大一升）、小壺13口（各小一升）の計20壺を納めると書かれています。

国内でつくられた蘇の品質や貢進時期を集約管理するのは国司の役目であり、武蔵国でつくられた蘇の一部は、国司のような限られた役人たちの口にも入っていたと考えます。

筆者も先日、現代に再現された蘇を奈良県の牧場から取り寄せて食べてみました（自分で作るとなると牛乳を7～8時間煮詰めなければなりません）。表面はほんの少し苦く、噛むと優しい甘味が感じられます。例えるならば、味が控えめなチーズや生キャラメル…でしょうか。

このほかにも出土木簡から判明している武蔵国の特産品には「布奈」（魚のフナの加工品）や「鼓」（大豆と海藻を原料とする醸造品）などがあり、これらもやはり国司の口に入っていたのではないのでしょうか。

さて、当館では7月26日（土）から11月3日（月祝）の会期で、企画展「古代国司と国司館～都から来た役人とそのすまい～」を開催します。府中市内で見つかった2か所の国司館の発掘調査成果をはじめ、国司にまつわる文献史料も交えて国司・国司館の実像を探ります。お楽しみに！



武蔵国が都へ納めた蘇に付けられた荷札木簡  
（奈良県平城京左京三条二坊八坪二条大路濠状遺構出土）

出典：奈良文化財研究所「木簡庫」  
<https://mokkanko.nabunken.go.jp/ja/6AFIUO40000274>



特別展

# 田んぼとくらし

～そだてて、つくって、つかまえて～



7/19 (土) ～ 9/7 (日)

会場：本館 1 階 特別展示室

ここ最近、お米の価格が高くなったり、さらには店頭から姿が消えたりしています。そうしたことからお米、ひいては稲作を取り上げているニュースを毎日のように目にします。

稲作といえば田んぼをイメージするでしょう。現在府中にある田んぼの1年は、4月の田起こしからスタートします。5月下旬に水が入れられて、6月から田植えが行われるという流れが多いようです。そこからは田んぼの様子をみながら、除草や水の管理、消毒をして、稲の成長を促します。そして10月頃になって稲刈りです。それが終わった後の田んぼは、稲株を残したまま春を迎え、また田起こしが始まるというサイクルで動いています。しかし、むかしの田んぼはそれだけではありませんでした。

市内の稲作農家さんに1960年代以前の田んぼのことを尋ねると、「稲刈りが終わった後は、すぐに麦をまくために田んぼを耕した」とか、「麦を刈った後の株は頑丈で切り口も鋭いから、足を切らないよう気をつけた」などと麦作についての話を聞くことができます。かつての府中では、稲刈りが済むと田んぼを耕し直して麦を播き、田

植えの直前までに麦刈りをする二毛作が行われていました。

田んぼでそだてた作物は麦だけではありません。田んぼと田んぼの間、もしくは田んぼと用水路の間にある畔で大豆や小豆、ソラ豆、ササゲといった豆類をそだてていたのです。そうした豆は、自家消費にまわされました。

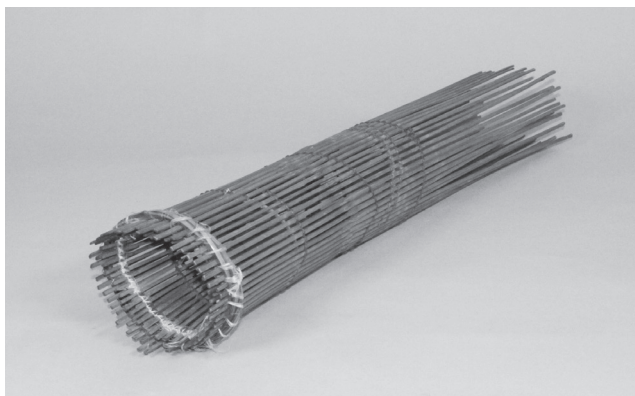
また、「うちの父親はドジョウが好きで、田んぼに何個もドウをしかけていた」というような田んぼで行う魚とりの話で農家さん同士が盛り上がることも珍しくありません。かつての田んぼには、用水路を通じて多摩川から魚がたくさん入ってきました。田んぼをもつ農家さんは、そうした生き物をつかまえては、おやつの代わりや、ご飯のおかずにしていました。

さらには、いまでは切り刻んで捨ててしまうことの多い、実を落とした後のわらも余さず利用しました。例えば、家畜のエサにしたり、ワラジなどのわら細工や田んぼ・畑の肥料の材料にしていたのです。

しかし、田んぼをとりまく環境や食生活の変化によって、畑作や漁は行われなくなり、わらも使われなくなりました。そして徐々にお米だけをそだてるようになります。そのためか、60歳代から下の世代の稲作農家さんは、稲作以外に使っていた田んぼのことを知らないという人が多いように思います。

本展示会では、次第に忘れ去られつつある、麦や大豆をそだてたり、魚をつかまえたりした、かつて田んぼを中心に行われていた多様な営みとくらしについて紹介します。田んぼが持っていた様々な側面とともに、それを活用してくらしに取り入れていた人々の工夫を知ってもらえればと思います。

(荒一能)



田んぼのドジョウをつかまえるためのドウ

# ハケ下のかやぶき民家

6/7 (土) ~ 2026/3/31 (火)

会場：園内 旧越智家住宅

「この家は古い。文化財として保存したいが…」。  
これは日本を代表する民俗学者として知られる宮本常一が、著書『私の日本地図 武蔵野・青梅』（1971年刊行）で府中市内のかやぶき民家に対して記した一文です。「この家」とは、当時芝間（南町）にあった越智家のことです。1968年（昭和43）に市内に残っていたかやぶき民家を調査した宮本は、全32棟の中でも古い建築様式を残している民家として、越智家に注目しました。とても大事に使われていて、過去の姿を復元しやすかったことがポイントだったようです。宮本による働きかけの効果があったのか、1973年の『広報ふちゅう』（4月15日号）では、この家が市に寄贈され、保存のために解体されたことが報告されています。それから14年後の1987年、同年開館した郷土の森（現郷土の森博物館）敷地内に移築復元されたのが、今回の展示会場となる旧越智家住宅です。

ところで、府中市域には府中崖線と呼ばれるハケ（崖）が東西にのびており、そのハケを境に、南側を「ハケ下」と呼んでいます。ハケ下は大昔の多摩川によって削られた低地で、かつてはその大半が水田地帯でした。そして、越智家はハケ下にあり、水田を持ち農業を営んでいました。こうした情報を加味して、博物館では府中市域の地形や土地利用を再現する目的から疑似的なハケ下ゾーンをつくり、旧越智家住宅を「ハケ下の農家」の代表例と位置付けています。

旧越智家住宅の外見や間取りは、江戸時代後期と言われる創建時の様子を想定して復元されました。改造が加えられていた内部については、かつての姿がよく分からないところもありました。そのため、住んでいた越智さんの明治～昭和にかけての思い出話や、調査時点で営まれていた昭和の

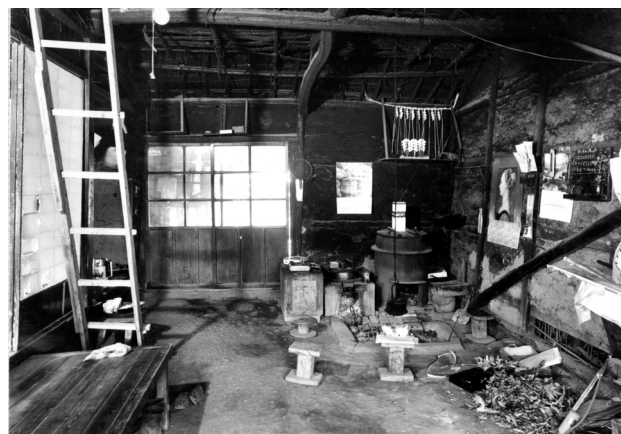


越智さんがくらしていた当時（1972年撮影）

くらしも参考に再現されています。

一方、詳細が不明だったため、1968年の調査時に存在していたのに、再現しなかった部分もありました。解体直前の写真を見ると、ドマには調理するためのカマドや、カマドの神様をまつる棚があったことが分かります。これらはすでに明治時代後期にはあったと伝えられています。そこで今回の展示会では、解体前に見ることができた旧越智家住宅内の姿を、一部ではありますが新たに再現します。

あわせて、これまで解説できていなかった越智家の間取りや、かやぶき屋根の仕組みについても紹介します。また、旧越智家住宅は、周辺に広がる畑や水田などとあわせて、ハケ下の農村風景を再現する役割を担っています。建物とともに、ハケ下の農村を形成する環境を知っていただければ幸いです。（佐藤智敬）



解体直前の越智家内ドマ（1973年撮影）

## series 戦後 80 年 — 府中と戦争

### ① こどもの飯茶碗と代用品

日清戦争（1894-95）、日露戦争（1904-05）を経て帝国主義国家としての地位を確立させた大日本帝国は、国民の軍国主義意識の高まりを利用して、1937 年（昭和 12）には日中戦争、さらに 1941 年には戦域を拡大させてアジア・太平洋戦争へと突き進みました。1945 年 8 月 15 日、ようやく戦争の時代に終わりを告げましたが、この間、多くの命が奪われました。

本シリーズでは 4 回にわたって、平和の尊さを見つめ直す機会になることを願って府中に残されたさまざまな戦争の記憶をたどります。

初回は発掘された戦争の記憶です。アジア・太平洋戦争当時のくらしを示す品々は、旧家の蔵のなかに残されていることもあります。発掘調査で出土することも少なくありません。

最初に紹介するのは、こどもが使う飯茶碗です。爆弾を落とす飛行機、刀や剣を持つ少年と飛行機、「のらくろ」と軍旗（旭日旗）が描かれていて、こどもたちが使う食器にも、戦争の影が濃厚に映し出されていることがわかります。

ちなみに「のらくろ」は 1931 年に連載が始まった田河水泡の漫画です。主人公である黒犬の野良犬黒吉、通称のらくろが軍隊で成長し手柄を上げていく物語です。とても人気がありましたが、戦争が激化した 1941 年には不謹慎との理由で打ち切りになり、戦後に復活しています。戦後生まれの人たちにも馴染みのあるキャラクターといっ

てよいでしょう。さて、戦争の激化は軍需を優先させ、金属の民間消費を規制するようになります。1941 年には金属の不足を補うため、官民所有の金属類を回収することまで行われました。各地でお寺の鐘が供出されたことは有名ですが、それは日常生活の品々にも及び、焼き物の代用品が数多く作られました。写真 2 は湯たんぽと釜です。

これら代用品からは、戦時下に国民生活が隅々まで統制されていたことがわかります。食器を



1. こどもの飯茶碗



2. 焼き物の湯たんぽと釜

3. 焼き物の  
ベイゴマ

はじめとする焼き物にはどこで誰が生産した製品なのかわかるように、生産者番号を付けることまで義務付けられていたのです。湯たんぽに記された「瀬 828」がこれで、「刀や剣を持つ少年と飛行機」が描かれたこども茶碗の底にも見えます。

代用品はこどもの遊び道具にも及び、焼き物のベイゴマまでつくられました（写真 3）。壊れやすいことはいくつでもありません。鉄製に比べて軽いので、ぶつかった際に弾け飛ぶ迫力に欠けていたと思います。

戦時中は国民に向けた戦意高揚、生活統制、精神動員のためのスローガンが盛んにつくられました。「欲しがりません勝つまでは」は、その代表格でしょう。ここで紹介した品々は、戦争末期につくられたもので、このスローガンの精神を具体的に示すものといえます。（深澤靖幸）



## 令和 6 年度 利用状況

| 区分                                       |    | 有料      |       | 減免<br>( 障害者・<br>4 歳未満等 ) | 特別放映<br>等 | 合計      |
|------------------------------------------|----|---------|-------|--------------------------|-----------|---------|
|                                          |    | 一般      | 団体    |                          |           |         |
| 博物館<br>観覧者<br>開館日数<br>256 日              | 大人 | 177,580 | 1,037 | 46,176                   | —         | 224,793 |
|                                          | 子供 | 25,003  | 5,832 | 54,830                   | —         | 85,665  |
|                                          | 小計 | 202,583 | 6,869 | 101,006                  | —         | 310,458 |
| 上記のうち<br>プラネタリウム<br>観覧者<br>放映日数<br>216 日 | 大人 | 17,728  | 928   | 7,203                    | 5,679     | 31,538  |
|                                          | 子供 | 8,544   | 4,805 | 5,416                    | 2,906     | 21,671  |
|                                          | 小計 | 26,272  | 5,733 | 12,619                   | 8,585     | 53,209  |

※本館大規模改修工事のため、5 月 31 日まで全館休館、7 月 19 日まで本館（プラネタリウム含む）を休館しました。

## 令和 6 年度 寄贈・寄託資料一覧

| No. | 寄贈・寄託者<br>(敬称略) | 資料名          | 分類 | 数量   | 受入 |
|-----|-----------------|--------------|----|------|----|
| 1   | 中村 正義           | 甲冑・馬具        | 歴史 | 2 点  | 寄贈 |
| 2   | 戸井田和義           | 一〇〇式司令部偵察機尾翼 | 歴史 | 1 点  | 寄贈 |
| 3   | 人見氏子中           | 木造大日如来坐像他    | 歴史 | 一式   | 寄贈 |
| 4   | 鹿島田多慧子          | 鹿島田家文書       | 歴史 | 一式   | 寄託 |
| 5   | 大國魂神社宮司<br>猿渡昌盛 | 大國魂神社文書Ⅱ     | 歴史 | 一式   | 寄託 |
| 6   | 中村 正義           | 太鼓・子供神輿      | 民俗 | 3 点  | 寄贈 |
| 7   | 伊藤久美子           | 乗馬用（競馬式）鞍、鞭他 | 民俗 | 16 点 | 寄贈 |
| 8   | 下村 盛章           | 五月人形         | 民俗 | 26 点 | 寄贈 |
| 9   | 田中 郁雄           | 元禄 4 年銘石経塔   | 民俗 | 1 点  | 寄贈 |
| 10  | 森 友彊            | 8 ミリカメラ他     | 民俗 | 5 点  | 寄贈 |
| 11  | 工藤 貴子           | 諸念佛記他        | 民俗 | 4 点  | 寄贈 |
| 12  | 小倉 純            | 大賀一郎博士色紙     | 大賀 | 1 点  | 寄贈 |

### 資料をご寄贈ください！

博物館では府中に関わる資料を集めています。  
寄贈をご検討いただける方がいらっしゃいましたら、  
ご一報ください。

昭和 40 年代以前の家電製品／府中に関わる  
古写真／養蚕や信仰に関わる資料／府中  
で出土した土器や石器 など



## 新刊案内

＊『府中市郷土の森博物館紀要』38 号  
学芸員他による研究報告・論文集です。  
400 円

- ・アジア・太平洋戦争下の学校生活  
— 旧制明星中学校の事例 — [高島秀樹]
- ・多摩川中流域の名号板碑をめぐって  
— 秋留台地周辺・法台寺・無量光寺 —  
[深澤靖幸]
- ・島嶼の神社に奉納・集積された中世の經典  
— 東京都三宅村（三宅島）富賀神社旧蔵經典断簡 —  
[加増啓二]
- ・写真から考察する戦前戦後の商家の暮らし  
～ 蕪木家ファミリーヒストリー ～ [かぶらぎみなこ]
- ・むかしの美容院・府中基地・八幡町の思い出  
～ 高橋隆則ライフヒストリー ～ [佐藤智敬]

＊府中市郷土の森博物館ブックレット 26  
『武蔵府中のケヤキ並木』 400 円



府中のシンボル「ケヤキ並木」は、いつ生まれ、かつてはどんな姿をしていたのでしょうか。1924 年（大正 13）の国の天然記念物指定から 100 年、その歴史をひもときます。

＊府中市郷土の森博物館ブックレット 27  
『古代たまの寺とみほとけ』 400 円



仏教はここ「たま」（古代武蔵国多磨郡）でどのように広まっていったのでしょうか。発掘調査で見つかった仏教に関わる大小さまざまな遺構や遺物を中心に紹介します。

※ミュージアムショップ・郵送にて購入できます

「あるがぜあ」は当館 HP で閲覧できます！

No. 1 ～最新号を PDF で掲載しています



# 天文はじまり物語



## ①宇宙のはじまり

今回から始まったシリーズ「天文はじまり物語」では、宇宙に関する様々な“はじまり”についてご紹介します。第1回目のテーマは「宇宙のはじまり」です。

宇宙は、時間や空間、そして物質の概念がない「無」から生まれたと考えられています。「無」では、とても小さい宇宙のタネのようなものが生まれては消えてを繰り返していました。そんな宇宙のタネの中から、何らかの原因で消えずに成長したものがありません。これが、私たちの住む宇宙のはじまりで、今から約138億年前のことでした。

宇宙の誕生から1秒にも満たないわずか $1/10^{34}$ 秒後、まだ非常に小さな宇宙が加熱され、超高密度で超高温な火の玉状態になりました。この状態を「ビッグバン」と呼びます。

ビッグバンの後、宇宙は急激に膨張していきます。このとき初めて、宇宙に光子や電子、クォークなど素粒子、つまり物質が誕生したのです。これら物質が生まれたころの宇宙は、光子が大量にあった電子とぶつかり、光が通らない、モヤがかかったような状態でした。

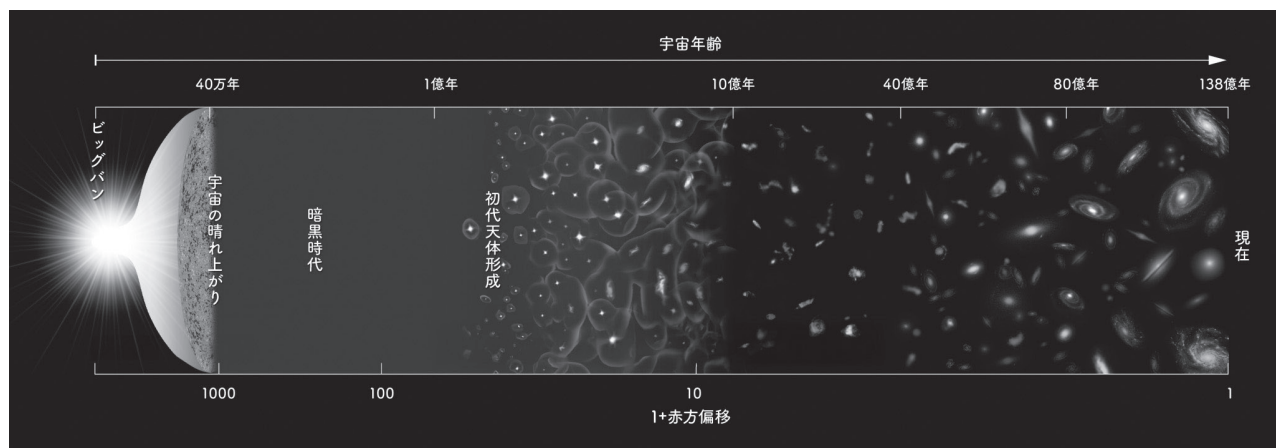
このような宇宙は膨張するにつれ、温度が下がっていき、素粒子のうちクォークが集まり、

陽子と中性子となります。さらに、陽子や中性子が集まり、水素やヘリウムなどの原子核が生まれました。ここまでの、宇宙のはじまりから3分の間に起きた出来事です。

さらに宇宙が膨張し、温度が下がると、水素やヘリウムなどの原子核と電子が結合し、原子となります。光子が通る邪魔をしていた電子が少なくなっていったため、徐々に光が通れるようになり、宇宙誕生から38万年後には、宇宙の見通しが良くなりました。これを「宇宙の晴れ上がり」と呼びます。

その後、原子が集まり恒星が生まれ、恒星が集まり銀河となり、宇宙は現在の姿へと進化していきました。

これが現在主流になっている「宇宙のはじまり」の考えです。遠くの天体たちを観測することにより、ビッグバンの後に起こった急激な宇宙の膨張は現在も確認されています。しかし、まだわかっていないことが多く、高エネルギー加速器研究機構（KEK）を含む多くの施設で、科学者が研究している分野です。今後、新たな事実がわかるかもしれません。これからの研究成果にも注目してください。（村井太一）



宇宙の歴史のイメージ © 国立天文台